西俊輔の「毎日楽しく」

Vo1.69　2011年5月号

経営学者のピーター・ドラッカーがブームになってしばらく経ちます（この方の肩書きがこれで正しいのかは議論がありそうです）。「もしドラ」というベストセラー小説に加え、ユニクロの柳井氏など有名な経営者がドラッカーの信奉者ということもブームの後押しをしていると思いますが、今月はドラッカーが説く企業倫理や企業人の倫理についてご紹介します。

ドラッカーによれば、これまで数え切れないほど説かれ、書かれてきた企業倫理や企業人の倫理というものは、なんら企業とは関係のない、まったく単純な日常の正直さについてのものだったといいます。企業人たるものは、ごまかしたり、盗んだり、嘘をついたり、贈賄・収賄したりしてはならないなどと厳かに言われますが、これは企業人に限らず、誰もがしてはならないことです。すなわち、ビジネスの倫理というものが別にあるわけではなく、たとえ大企業の社長であろうと、議員であろうと、人間の一般的なルールの適用を免れることはできないということです。

これについては、この「毎日楽しく」で何度も書いている京セラの稲盛和夫氏も同じことを言っています。経営も人間が人間を相手に行う営みなのだから、そこですべきこと、あるいはしてはならないことも、人間としてのプリミティブな規範にはずれたものではないはずで、嘘をつくな、正直であれ、欲張るな、人に迷惑をかけるな、人には親切にせよ･･･そういう子どものころ親や先生から教わったような人間として守るべき当然のルール、人生を生きるうえで先験的に知っているような、「当たり前」の規範に従って経営も行っていけばいい、と言います。

ドラッカーはこうした人間としての当然の規範に加えて、組織のリーダー、あるいはリーダー的地位にある人たちをプロフェッショナルと呼び、プロフェッショナルの責任（倫理）についてもふれています。すなわち、顧客に対して必ず良い結果をもたらすと約束することはできなくても、「知りながら害をなすことはしない」と約束しなければならないということです。

今回の震災による福島原発の問題では、このプロフェッショナルの責任というものをあらためて認識させられました。